



がんの「目印」を知る検査

— 腫瘍マーカー検査 —

指導：順天堂大学附属浦安病院臨床検査医学科 准教授 三宅 一徳

企画：
日本医師会

No. 431

腫瘍マーカー検査とは

がんは、正常な細胞が異常な細胞に変化することによりおこる病気です。がん細胞は、体のなかで特有の物質を作ることがあります。血液のなかに、この物質がどれくらい含まれているのかを測定するのが腫瘍マーカー検査です。がんの種類によって作られる物質が異なるため、30以上の種類があります。

この検査は、がんがあって腫瘍マーカーの値が上昇している場合には、がんの性質を知る助けとなります。また、薬や放射線などの治療を受けているときは、値の変化をみることで、有効かどうかを評価する指標の一つとなります。その他、治療後に再発の可能性を早期に知る手がかりとしても役立ちます。

腫瘍マーカーの種類	対象となるがん
AFP (α-フェトプロテイン)	肝がん、精巣腫瘍 など
PIVKA- II	肝がん
CEA (がん胎児性抗原)	大腸・胃・膵・肺・ 子宮・卵巣・乳がん など
CA19-9	膵・胆道・胃・大腸・ 肺・卵巣がん など
CA125	卵巣・子宮がん など
CA15-3	乳がん など
CYFRA (シフラ)	肺がん など
SCC	食道・肺がん など
PSA (前立腺特異抗原)	前立腺がん

陽性なら「がん」？

腫瘍マーカーはがんの「目印」として、がん検診にも利用されています。陽性の場合、がんの可能性を考えて精密検査を行う必要がありますが、直ちにがんとは診断できません。

多くの腫瘍マーカーは、健康な人の体内にも微量ですが存在し、感染症などの良性の病気や年齢によって、また喫煙などでも値が上昇することがあります。がんにはそれぞれ個性があるため、腫瘍マーカーの数値だけで単純にがんであるかどうかや、がんの進行度を判断することはできません。

陰性でも油断は禁物

がんは早期発見が重要です。腫瘍マーカーは、特に小さながんでは陽性として値にあらわれない場合もありますので、この検査だけががんを早期発見することはできません。早期発見には、X線検査や超音波検査、CT、MRIなどの画像診断、内視鏡検査、病理検査などと組み合わせて行うのが効果的です。

